

テレビ番組におけるバラエティ番組の分類

－成長期－

鹿 島 我

A Classification of the Variety Programs in TV Programs

－ The Growth －

Ga KASHIMA

I はじめに

現在、バラエティ番組を取り巻く環境はけして良好とはいえない。2013（平成 25）年 9 月から 2014（平成 26）年 8 月までを振り返ってみてもタモリが司会を務めるフジテレビ制作のお昼のバラエティ番組『笑っていいとも』が 3 月末をもって 32 年間の放送に終止符を打った。また、同じフジテレビにおいては、日曜 19 時の『ほこ×たて』が、過剰な演出、いわゆる「やらせ問題」を遠因として打ち切りとなった。

それでも、民間放送（以降、民放）における 19 時から 22 時までのゴールデンタイム、19 時から 23 時までのプライムタイムの番組はほとんどがバラエティ番組である。また、全日の視聴率にカウントされない 24 時以降の深夜枠においても民法各局は続々と実験的なバラエティ番組を制作している。

筆者は放送作家として、多くのバラエティ番組の制作に携わってきた立場から京都光華女子大学短期大学部（以降本学）研究紀要第 49 集において、バラエティ番組の定義づけを行い、同 51 集において、1953（昭和 28）年 2 月 1 日、日本におけるテレビ放送開始から 1959（昭和 34）年 3 月 1 日のフジテレビ開局までを「創世期」としたバラエティ番組の分類を試みた。

本稿はこれに続く続稿であり、全国ネットの大手民法 4 局の開局以降、1969（昭和 44）年末までを「成長期」として論ずるものである。この期間には 1956（昭和 31）年に経済白書に「もはや戦後ではない」と明記され、1958（昭和 33）年 7 月から 1961（昭和 36）年まで 42 か月続いた岩戸景気があり、設備投資が景

気を主導し発展をつづけた期間が含まれる。放送業界も皇太子御成婚、東京オリンピック開催において、放送を充実させるため、VTR 機の導入、本格的なカラー放送が始まるなどの技術革新が進み、テレビが娯楽の中心に位置づけられる礎が築かれた時期でもある。

これらが、バラエティ番組にどんな影響を与えたかも検証したい。

II 成長期「第一期」のバラエティ番組

1959（昭和 34）年 3 月 1 日、フジテレビの開局により日本の 4 大ネットのキー局が全て開局を果たした翌 4 月に行われたのが、皇太子御成婚のパレードである。このパレードの 1 週間前に NHK の受信者契約数が 200 万台を突破したことからもこのイベントがテレビ界に与えた影響は大きいといえる。

1960（昭和 35）年 7 月には、東芝、日立、三菱の 3 社がカラーテレビの販売を開始。販売価格は 21 インチ 52 万円、17 インチ 42 万円と高価ではあったが、NHK と民法 4 局は同年 9 月 10 日、カラーテレビの本放送をスタートさせ、新たな時代を迎える準備を始めた。また、11 月には、ラジオ東京放送が東京放送（TBS）に、12 月には日本教育テレビが NET に社名を統一した。

そんな 1959（昭和 34）年 3 月 1 日から 1961（昭和 36）年 12 月 31 日までのバラエティ番組の分類を試みる。

1. 1959年3月～1960年に誕生したバラエティ

『スター千一夜』(1959年3月1日21時～ フジテレビ)

フジテレビ開局の日にスタートした各界のスターを招いてのインタビュー番組。ジャンルのにはオーソドックスなトークバラエティに分類する。

『おとなの漫画』(1959年3月2日12時50分～ フジテレビ)

フジテレビ開局の翌日にスタート。月曜から土曜まで毎日5分間の生放送コントバラエティである。主演はクレージーキャッツ。その日の朝刊に掲載された話題を選び、昼の放送までに放送作家が台本を書き、出演者がセリフを覚え、ディレクターが演出を加え、本番に備えた。

『番頭はんと丁稚どん』(1959年3月9日19時30分～ NET)

大阪、毎日放送制作の公開コメディ型バラエティ。作者は花登筐。番頭役の芦屋雁乃助と丁稚役の茶川一郎、芦屋雁平、大村崑が毎回繰り広げる人情喜劇が話題となった。

『お笑いタッグマッチ』(1959年3月12日 12時15分～ フジテレビ)

タイトルにタッグマッチとあるように落語家が紅コーナーと白コーナー、紅白に分かれて争う。司会は春風亭柳昇。上方落語の大喜利でいう「あたかも読書」のルーツともいえる内容から大喜利型バラエティであるといえる。

『デン助劇場』(1959年4月1日20時～ NET)

タイトル通り、デン助劇団の劇場中継バラエティ。劇団の主催者であるデン助こと大宮敏充が脚本、演出、主演の一人三役をこなした。ハゲ頭に口ひげ、どんぐり眼に濃い眉毛の江戸っ子、デン助が織りなす人情喜劇。

『ザ・ヒットパレード』(1959年6月17日19時～ フジテレビ)

フジテレビが渡辺プロダクションの全面協力で制作した音楽バラエティ。人気ロカビリー歌手だったミッキー・カーチスや長沢淳が司会を務めた。作曲家で当時、フジテレビのディレクターだった梶山浩一が演出

を担当。

2. 1961年に誕生したバラエティ

『スチャラカ社員』(1961年4月2日12時15分～ TBS)

海山物産の大阪支店を舞台に繰り上げられる大阪、朝日放送制作の公開録画のコメディ。出演は女性社長がミヤコ蝶々。中田ダイマル・ラケット、藤田まことらやる気のない無気力社員たちが繰り広げる騒動を描く。公開コメディ型バラエティ。

『夢であいましょう』(1961年4月8日22時～ NHK)

人気デザイナー・中島弘子がホステス役を務める複合ショー型バラエティ。歌とコントとトークで構成される。番組から『上を向いて歩こう』『遠くへ行きたい』『こんにちは赤ちゃん』等のヒット曲が生まれた。

『シャボン玉ホリデー』(1961年6月4日18時30分～ 日本テレビ)

初期はザ・ピーナッツ中心、61年暮れからはクレージーキャッツ中心への複合ショー型バラエティ。コント、歌、トークを中心に構成されている。この番組からクレージーキャッツは「ガチョーン」「ハイそれまでよ」「お呼びでない」「ハラホロヒレハレ」等の流行語を生み出した。

3. この時期の特徴

フジテレビが開局と同時に先発局に負けじと次々とヒット番組を制作している。また、関西の民放局も「お笑い」という武器と花登筐、香川登志緒という作家の個性で全国に通じるコメディを制作しているのがよくわかる。現在は関西発の全国的なコメディは高視聴率を期待するのは難しいことからその原因は今後、検証したい。

Ⅲ 成長期「第二期」のバラエティ番組

VTRの導入、カラー放送の本放送開始という技術的な進歩を遂げたテレビ界は東京オリンピックというビッグイベントを控え、さらに整備を進めていく。1962(昭和37)年9月、民放13社、電通、東芝の共

同出資による視聴率調査会社「ビデオリサーチ」が設立。本格的な視聴率調査を実施した。10月には、NHK総合が中断していた平日15時～17時半の時間帯に定時番組を放送。全日放送となった。

1963（昭和38）年には、初の日米宇宙中継で、アメリカ、ダラスでバレード中のケネディ大統領が暗殺される衝撃映像が伝えられた。10月には、民放連が「テレビの青少年におよぼす影響」の調査結果を発表。また、郵政省主催の放送番組懇談会、中央青少年問題協議会の「暴力番組の影響調査」、国民政治研究会の「廃止が望まれる低俗番組」が公表され、テレビの負の部分が明らかになった時期でもある。1964（昭和39）年4月には日本科学技術振興団のテレビ部門として、現在のテレビ東京の前身にあたる東京12チャンネルが開局したが、早々に経営不振に陥り、放送内容の改善を迫られることになる。

そんな1962年から1965年までのバラエティ番組の分類を試みる。

1. 1962年に誕生したバラエティ

『てなもんや三度笠』（1962年5月6日18時～TBS）

大阪、朝日放送制作の公開コメディ型バラエティ。舞台は江戸末期、主役は全国的に無名だった藤田まこと、共演は白木みのる、財津一郎ら。最高視聴率が60%を超える伝説の番組。

『アベック歌合戦』（1962年10月8日19時30分～日本テレビ）

トニー谷司会の視聴者参加型ゲームバラエティ。タイトル通り、アベックが出場し歌を競い合う。トニー谷の「あなたのお名前なんてえの?」という軽妙なフレーズが流行語となった。

『オリンピックショウ 地上最大のクイズ』（1962年11月13日19時30分～フジテレビ）

オリンピック開幕の2年前に始まった視聴者参加型クイズバラエティ。1回の出場者が100人、優勝賞金が100万円。クイズは毎回15問出題され、正解すると階段状の聖火台が点灯されていく。

2. 1963年に誕生したバラエティ

『アップダウンクイズ』（1963年10月6日19時～NET）

大阪、毎日放送制作の視聴者参加クイズバラエティ。6人の回答者が上下動するゴンドラに乗り、1問正解するごとに1段階アップ、間違えると一気に最初の位置まで落ちるというシステムが話題となった。10問正解の賞品がハワイ旅行であったことも人気の秘訣であったと思われる。

3. 1964年に誕生したバラエティ

『ミュージックフェア』（1964年8月31日21時～フジテレビ）

オーソドックスな歌謡バラエティ。当初の司会は越路吹雪。毎回違う歌手を共演させるのが唯一とあっていい演出。現在も続く長寿番組である。

4. 1965年に誕生したバラエティ

『金曜寄席』（1965年3月12日22時～日本テレビ）

当時人気のなかった落語界を盛り上げ、寄席に客を呼ぶために立川談志が企画を持ち込んだ落語の大喜利バラエティ。演芸、インタビュー、大喜利の三部構成であった。

『踊って歌って大合戦』（1965年4月2日日本テレビ）

林家三平がメイン司会の視聴者参加ゲームバラエティ。視聴者が賞金をかけ、ただただ踊り狂うという内容の番組。司会の三平も阿波踊りとツイストをミックスしたダンスで盛り上げた。当時「低俗番組」のレッテルを貼られた。

『11PM』（1965年11月8日23時～日本テレビ）

日本テレビと大阪、読売テレビが交互に制作した深夜の大人向けワイドバラエティ。愛川欣也、大橋巨泉、藤本義一が司会進行を担当するようになり人気上昇した。

5. この時期の特徴

技術革新が進む中、バラエティ番組も大がかりなセットを組む等、視覚的に見せる番組が増加していることが読み取れる。また、バラエティ番組がゴールデンタイムという枠からもはみ出し、テレビの娯楽性が

さらに強調され始めた時期ということもいえる。

IV 成長期「第三期」のバラエティ番組

1966（昭和41）年3月には、電電公社（NTTの前身）がカラーテレビ用マイクロ派回線の全国ネットワークを完成させ、カラー番組の全国ネットが可能になり、テレビ界は急ピッチでカラー化を進める。これを受けて、11月には通産省が家電4社にカラーテレビの値下げを要請した。

1967（昭和42）年12月31日、NHKのテレビ受信契約数が2000万台を突破し、娯楽の王様として君臨、1969（昭和44）年11月にはアメリカ、アポロ11号が月面着陸に成功。テレビ中継され、テレビの可能性を強烈にアピールした。

また、1964（昭和39）年のTBS系JNN協定に続き1966（昭和41）年、日本テレビ系のNNN協定、フジテレビのFNN協定が締結され、キー局と系列局の提携関係がより緊密化されたのもこの期間中であるといえる。

そんな1966年から1969年のバラエティ番組の分類を試みる。

1. 1966年～1967年に誕生したバラエティ

『笑点』（1966年5月15日16時30分～ 日本テレビ）

現在まで続く日曜日夕方の人気番組。大喜利型バラエティである。既出の『金曜寄席』が発展的に日曜日の夕方に進出した。当初は演芸、トーク、大喜利の三部で構成。

2. 1968年～1969年に誕生したバラエティ

『お笑い頭の体操』（1968年2月3日19時30分～ TBS）

多湖輝のベストセラー『頭の体操』からタイトルを借用。司会は大橋巨泉、レギュラー回答者は月の家円鏡。毎回、「テスト」と称される設問数問に解答者が答えていくという構成。ゲームバラエティ。

『お昼のゴールデンショー』（1968年4月1日12時～ フジテレビ）

毎回、お笑いのゲストと歌のゲストを迎え、コントやゲームを生放送で繰り広げるという内容。メイン司

会は前田武彦。売り出し中のコント55号もレギュラーであった。

『夜のヒットスタジオ』（1968年11月4日22時～ フジテレビ）

生放送・フルコーラスを基本に、あらゆるジャンルの歌手、ミュージシャンが出演した。オープニングでは、最初に紹介された歌手が次に紹介する歌手の持ち歌をワンフレーズ歌い、それを次々と回していく等、歌謡バラエティとは一線を画す音楽バラエティである。

『唄子・啓助のおもしろい夫婦』（1969年4月6日22時15分～ フジテレビ）

タイトル通り、司会は鳳啓助、京唄子の夫婦漫才コンビ。視聴者の熟年夫婦をスタジオに招き、なれそめや悩みをおもしろおかしく聞いていく。視聴者参加トークバラエティ。

『連想ゲーム』（1969年4月9日20時～ NHK）

『みんなの招待席』の1コーナーから独立し1つの番組となった。クイズバラエティ。男女が赤組白組に分かれ、キャプテンの出すヒントから連想して正解を導いていく。

『コント55号の裏番組をぶっとばせ!』（1969年4月27日20時～ 日本テレビ）

当時、高視聴率番組だったNHKの大河ドラマ『天と地と』に対し、「日曜日20時台に最も視聴率を稼ぐ番組」をコンセプトに当時人気絶頂だったコント55号をメインに据えた番組。番組後半の野球拳が有名で、低俗番組のレッテルを貼られた。公開バラエティ。

『ヤングおーおー』（1969年7月3日20時～ NET→TBS）

制作は大阪、毎日放送。当初はNETでのネットだったが、いわゆる腸ねん転解消後、TBSでのネットに切り替わった。関西型公開バラエティ。

『8時だヨ!全員集合』（1969年10月4日20時～ TBS）

ザ・ドリフターズがメインの公開生放送バラエティ。前半のコント、後半のミニコントのコーナーの合間に短

く歌のコーナーを挟んで進行した。大がかりなセットが話題となった。

『NTV 紅白歌のベスト 10』（1969年10月6日20時～ 日本テレビ）

『NHK 紅白歌合戦』を毎週お茶の間にと「紅白歌合戦」と「ベストテン」を組み合わせた公開生放送の音楽バラエティ。司会者の他に紅組と白組キャプテンの存在が番組を盛り上げた。裏番組の『水戸黄門』を意識したのか、歌手はアイドルが中心。

『巨泉・前武ゲバゲバ 90分!!』（1969年10月7日20時～ 日本テレビ）

放送作家出身の二人のトークの合間にコントが入り込んでくるという手法で日曜日夜を圧巻する人気番組となった。この2人に加え、クレイジーキャッツ、コント55号等、他の出演陣も豪華。コントバラエティである。

『クイズタイムショック』（1969年1月9日19時～ NET）

視聴者参加型のクイズバラエティ。司会は田宮二郎。1分間12問のクイズに挑戦し、その解答数で優劣を競う。解答席がクイズ挑戦中は上昇し、解答終了後に元の位置に戻る。正解数が3問以下ならその際に回転しながら下りてくるのが見せ場。現在もリニューアルされて不定期に放送中。

3. この時期の特徴

日本のバラエティ番組史上、伝説ともいえる誰もが知る番組がこの時期に放送を始めている。VTR機の本格導入、カラー放送が始まる等、ハード面での充実により番組制作体制の基盤が構築された結果であると推測される。また、番組内容や放送時間こそリニューアルされているが、現在もなお放送中の番組があり、バラエティ番組の礎の多くがこの時期に完成したといえる。

映画や劇場ではなく、テレビから一挙にスターが生まれたのもこの時期の特徴である。テレビが急ピッチで娯楽の中心に躍り出たことを証明している。

V まとめ

日本におけるテレビ放送開始からフジテレビの開局前日までのバラエティ番組を系統だて、まとめた前稿に続き、本稿では、フジテレビの開局から万国博覧会（大阪万博）開幕の前年までのバラエティ番組を「成長期」に系統だてた。

実際に成長期とするにふさわしい番組が数多く誕生している。しかし、新しいバラエティジャンルは思ったよりも少なく、あらためて、バラエティ番組のジャンルの多くは創世記（1953年～1959年1月末）に誕生していることを証明する結果となった。

次稿では、成長期に続く期間を検証し、さらにバラエティ番組の系図作りを進めていきたい。

以上、本稿でのバラエティ番組の分類を図1に示し、結びとする。

参考文献

- 鹿島我 テレビ番組におけるバラエティ番組の分類 - 創世記 - 京都光華女子大学部研究紀要第51集
 テレビ60年 in テレビガイド 株式会社ニュース通信社
 高田文夫／笑芸人編 テレビバラエティ大笑辞典 白夜書房
 テレビ史ハンドブック 自由国民社
 テレビ欄研究会 愛蔵版 昭和のテレビ欄 1954-1988 TO ブックス

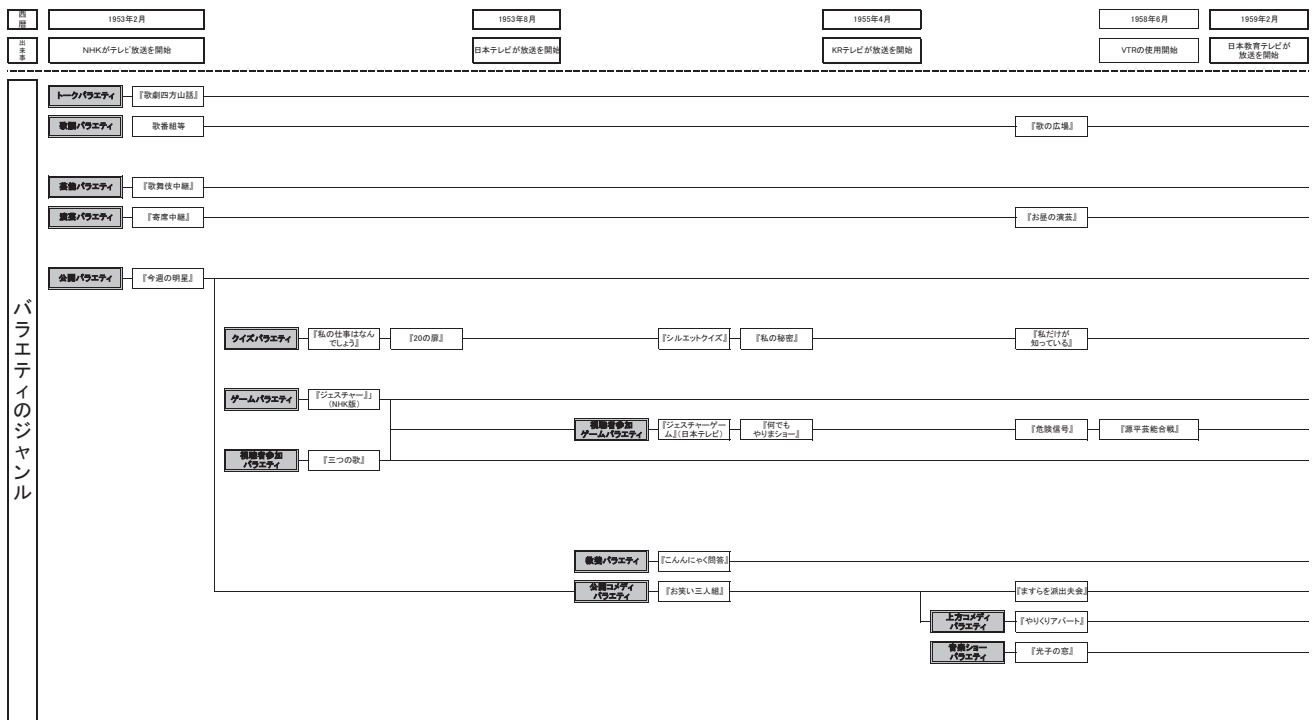


図1 バラエティ番組の変遷

